

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）
留学結果報告書

令和 7 年 8 月 2 2 日

山梨県知事 殿

本人氏名 野 畠 楓 華

次のとおり留学の成果を報告します。

留 学 先 国 名	リトアニア
学 校 等 名	Vilnius Kolegija
留 学 期 間	令和 6 年 8 月 2 7 日 ～ 令和 7 年 7 月 2 6 日
<p>はじめに、この留学を達成するためご支援いただいた全ての皆様にお礼申し上げます。わたしは昨年 9 月から今年の 6 月まで、リトアニアの首都であるヴィリニウスにて、1 年間の教育実習を行いました。わたしが教育実習を行ったのは、ウクライナから避難してきた子どもたちが通う Gravitas Schola という学校です。実習期間中には、当初予定していた Primary school（1 年生～4 年生）での実習に加えて、Middle school（5 年生～7 年生）と High school（8 年生～11 年生 ※実際に実習を行ったのは 10 年生と 11 年生のクラスのみ）での実習も行うことができました。以下、実習を終えての振り返りです。</p> <p>わたしの研究テーマである家庭の社会的経済地位による教育格差の特徴は、その「差」の原因のほとんどが家庭にあると考えられている。しかし、龍谷大学准教授松岡亮二が自身の著書で指摘するように、教員を目指す学生も、教職に就かない学生も、ほとんどが教育格差について学ばぬまま、学力や進学に対する社会的影響について(ほとんど)学ばぬまま、教員免許保持者として社会に出ていく(松岡2019)。この事実は、各家庭により生み出された教育格差は、学校での教育を通じて現状維持または拡大されているということ、また、教育格差は世代間で受け継がれていくということを意味する。</p> <p>そこで、学校現場から教育格差に対してどのようにアプローチできるかを実習を通して考えた。</p>	

①習熟度別授業

実習校での言語のクラス（英語・リトアニア語の授業）では、習熟度別授業が実施されている。文部科学省によると、「習熟度別・少人数指導は、各教科等の授業において、例えば、1つの学級を習熟度別に2つのグループに分けたり、2つの学級を3つのグループに分けて少人数で授業を行う授業形態・方法である」と定義されている。また、「習熟度別・少人数指導は、1つのグループを少人数にして指導を行うことにより、児童生徒一人一人に対してきめの細かい指導を行うことが可能となり、そのことによって指導の効果を高めることをねらいとして実施するものである」ため、一見子どもたちのそれぞれのレベルに合った進度や工夫ができることから、成績下位層のレベルの底上げに効果があると見られる。実習校の1クラスの人数は20人から23人ほどであり、先述の通り、担当していた英語のクラスは毎回2クラスに分かれて行われる。すなわち、1クラスにつき教師は10人から12人の生徒を教えることになる。授業内では教師と生徒の活発なコミュニケーションが大半を占め、生徒個人の特徴が可視化されやすい環境であったように思う。また、学年ごとに同じ教科書を用いているものの、教師にとって生徒のレベルに合った教材の準備が行いやすいことがHigh schoolでの実習で明らかになった。例えば、レベルが上のクラスでは教科書に加えて、教師がさらにレベルの高い教材を準備することが可能であり、またレベルが下のクラスでは教科書での学びを補うためにインターネット上にあるフリー教材やゲームなどが授業内で活発に使用される。このように、個人に合った学び方を提供できることが習熟度別授業の特徴である。

一方で、習熟度別授業は、グループ間の生徒の学力差が縮まりづらいというジレンマを抱えている。習熟度別授業は、それぞれの生徒の学力の立ち位置を明確にする。そのため、レベルが下のクラスに属する生徒を見ていると、レベルが上のクラスに所属する生徒に比べて、英語の学習に対するモチベーションを維持することに苦戦しているように見えた。また、授業中のおしゃべりやスマートフォンの持ち込みなどによってクラス内の風紀が乱れ授業が中断されることが多かった。遅刻や欠席をする生徒の数も多く（※1）、授業が進めづらいという難点もある。教育格差の削減のため成績下位層の学力を引き上げるという点に関して、習熟度別授業を取り入れるかどうかは検討の余地がある。

②柔軟な評価方法

前述の通り、この学校に通う生徒は難民の子どもたちであり、ほとんどがウクライナから避難してきた生徒である。そのため、生徒によっては欠席期間が2ヶ月などの長期に及ぶこともある。欠席が長期間に及ぶと、生徒の成績にも支障が起こりやすいが、この学校での評価方法に関して、High schoolの教員が非常に柔軟に対応していると感じた。

例えば、ほぼ毎回の授業で生徒に英語4技能と文法のうち最低一つに関わる課題を示し、評価を行っている。例えば、インターネット上にアップロードされている学習

プリントを使用したミニテストや、British Council などの英語試験の練習問題を用いたり、Speaking の評価では、生徒に一つのシチュエーションと特定の文法を指定し、ペアで会話を作成・実践してもらったりした。1 年間でこの小さな評価の機会を積み重ね、一年の学期末に平均を出し、それが最終的な成績となる。教師は生徒に暫定的な評価を定期的に、積極的に共有しており、生徒は今何が自分に足りていないのか確認することが可能になっている。さらに、小さな評価を積み重ねていくことで、教師にも利点が多い。生徒の学習の成果を日々評価していくことは、生徒一人一人の強みと弱点を可視化すること、クラス全体で勉強が足りていない技能や特定の文法、問題点を可視化することが可能になる。この情報をもとに、担当の教師と相談しながら課題設定を含む授業準備をすることができた。

教師によっては、評価が足りていないと感じた生徒が追加で評価の機会を得るために、生徒が自主的に英語でプレゼンテーションを行うことを歓迎するものもある。プレゼンテーションの内容は生徒が自由に設定でき、授業のはじめにクラスメイトの前で行われる。このプレゼンテーションによって教師が生徒の好奇心や興味の対象を知ることができる良い機会にもなっていた。プレゼンテーションが行われる前に、担当の教師と評価の仕方について相談し、評価を行った。

ほぼ毎授業で小さな評価が行われていること、生徒が教師に自身の暫定的な評価を相談しやすい環境は、生徒が自身の意思に関わらず出席できないことがあっても、成績を損なわないために必要不可欠な工夫になっていると考える。

4 技能をバランスよく積極的に使った授業内での小さな評価の積み重ね、生徒が自分の成績の位置を確認できる教師のオープンさ、生徒の自主性を促すプレゼンテーション評価、これらの仕組みは、生徒の英語学習に対するモチベーションを高める要因になっており、また、教師がそれぞれの生徒の強みと弱みを考慮しながら授業を準備することができることに役立っていると考ええる。また、従来の定期テストや宿題での評価に比べて、全ての生徒に努力の機会を平等に与えていると考えることができ、生徒の能力をより正當に評価できているのではないだろうか。

③

この学校の最も重要とも言える軸は、「子どもたちがウクライナ人としてのナショナルリティを理解し守りながら、リトアニアで世界市民の一員として生きること」である。どのクラスにも、ウクライナの国旗や青と黄色のデコレーションが施されているのと同時に、リトアニア国旗やリトアニアの歴史や文化を学ぶことができるポスターなども多く目についた。

特に印象に残ったある習慣がある。Primary school ではウクライナ語の授業開始前に、Middle school では月曜日の最初の授業開始前に、High school では月曜日朝 9 時に、ホールに全教員・生徒が集合しウクライナの国家を歌うという集会がそれぞれの校舎で毎週開かれていることである。一度、High school で不適切な落書きが発見され、急遽授業が中断され、この 3 年間の間に祖国ウクライナで何が起きているのか、そして何を考え、どう生きていくかの集会が開かれたこともあった。

教師が授業内で教えていること以外に、日常的な会話の中や、授業の進め方や、振る舞い方など、児童・生徒は学校生活の中にある全てから日々学び、成長している。教師が直接的には教えていなくとも、彼らはそれぞれ道徳心や倫理観、価値観、国民性、その国の文化や習慣を身につけていく。ウクライナの学校と日本の学校で、「直接的には教えられていないが児童・生徒が確実に学校で学び、身につけていること」は完全に異なっていることに気がついた。学校で教えられていること、そして教えられていないこと、児童・生徒が学ぶこと、そして学ばないこと、それらには全て意味があり、そしてそれらの学びが、それぞれウクライナ人や日本人を作っていくのだと考える。

④児童・生徒が必要とするものは何か考えること

子どもたちが生きてきた世界はわたしには想像してもしきれないものであり、流れてくるニュースに心が痛くなる日々だったが、目の前の生徒たちはわたしが今までに見てきたどんな子どもたちよりも活発で、エネルギーに満ち溢れており、良い意味で感情的であった。特に Middle school の子どもたちが印象的だった。

しかし、その裏には、教員のさまざまな努力がある。例えば小さなホールに置かれたソファや、昼休みに学校の外への外出が認められていること、アウトドア教育や教室を離れた場所での学習の機会が多く設けられていることなどである。生徒にはあらゆる制限がかけられていることや異国の地での生活という点で、精神的ストレスがかかっているということが考慮され、「生徒が学校で安心できるように」という目的で行われている。

さまざまな理由から精神的な傷を抱える児童・生徒も多く、そのため各学校に 2 人から 3 人の心理カウンセラーが常に滞在している。Primary school では小さな子どものための遊び部屋のような部屋が設けられており、子どもたちがリラックスしたり休憩を取るとき、また個人的にカウンセラーやクラス担任と話が必要なときなどに使われていた。Middle school と同様に High school にも、ありとあらゆるスペースにソファが置かれくつろげるスペースが設けられており、生徒が不安を感じたとき、教室にいたくないときにゆっくり休める工夫がされていた。これらの工夫は、彼らが祖国での戦争から逃れてきたということ、またリトアニアという異国の地で生きなければいけないということを考慮し、教師の試行錯誤によって備えられたものである。

Gravitas Schola で教員として働くウクライナ人、リトアニア人の先生方と共に働いたことで、子どもたち一人ひとりの背景を知ることがどれだけ大切で、またどれだけ難しいことであるかを知った。一人ひとりの家庭環境も、経験してきたことも、何もかも異なり、自身のことについて話してくれる生徒もいれば話さない生徒もいる。その中でより児童・生徒のことを理解し、より良い学習の機会を提供しようと試みるならば、一人一人との信頼関係を築くことが必要不可欠であると感じた。

少しでも見逃してしまえば、世界から取り残されてしまう子どもたちは、ウクライナの子どもたちに限った話ではなく、日本の、私たちのすぐそばにも存在していることを忘れてはいけないとより強く感じた。日本社会に潜む社会的経済地位による教育格差を少しでも減らすためには、生徒の一人一人の背景を知ろうと努力すること、それらを考慮し、生徒一人ひとりが努力できる環境や状況を教室内で生み出し、その努力を見逃さずに正当に評価することが何よりも大切なことなのだと気がついた。そのための方法は、おそらく国によって、学校によって、子どもたちによって異なっている。

だからこそ、教師一人一人の努力を求める前に、大学の教職課程で社会的経済地位による教育格差の実態を、教師を目指す学生や教育に関わる人全てが、学ぶことができる環境を整えなければいけない。そのため、わたしは大学卒業後、教育と社会学を融合して学ぶことができる博士課程への進学を考えている。将来的には、教育格差という授業を大学の教職課程に組み込むことを目標に、これからも日々精進していく。

※1 ウクライナから避難してきた子どもたちであるため、一時帰国や家族との再会など欠席の理由はさまざまである。